

文化的景観の構成要素としての観光ガイド —世界遺産“日光の社寺”の堂者引きをめぐる一試論— Tourist guides as an element of cultural landscape

鈴木 晃志郎

富山大学 人文学部

1. はじめに

古くから山岳信仰の聖地として発展した日光は、鎌倉時代には神仏習合と修験道の思想的影響の下、日光三山それぞれに神と仏の両方が宿るとする「日光三所権現」の信仰形態をなし、関東の守護神としての地位を確立。しかし、戦国末期には豊臣秀吉によって山領のほとんどを没収され、没落の危機に瀕していた。

関ヶ原の戦いで豊臣方に勝利し、江戸に新たな幕府を開いた徳川家康は、1609（慶長14）年、日光山座禅院および衆徒中に対して日光領を安堵。その一方、わずか4年後に南光坊天海を日光山の貫主に送り込み、事実上の支配下に置いた。家康と天海の目論見は、家康が日光入山目前の天海に与えた「東叡山」の山号に表れている。すなわち、西の京都と比叡山の関係に比肩する、関東の新たな聖地の創造である。

天海の入山から3年後、死に瀕した家康は側近を集め、自らの一周忌ののち、日光に神廟を建立して関東の鎮守にするよう遺言。続く秀忠の治世、その柩は日光へ移され、東照大権現となった。現在もなお威容を誇る日光の社殿群は、1634～1636（寛永11～13）年に、三代将軍家光が行った「寛永の大造替」で整えられたものである。現

在の社殿群は、本殿・石の間・拝殿、正面及び背面唐門、東西透塀（すきべい）、陽明門、東西廻廊の国宝計8点と、上社務所、神楽殿、神輿舎、鐘楼、鼓楼、本地堂、神厩など計34の重要文化財から構成されており、これらは1999年に『日光の社寺（Shrines and temples of Nikko）』としてユネスコの世界文化遺産に登録された¹。

徳川幕府によって“再生”された聖地日光は、その性格上、一面においては参詣客の頭数からその所作にいたるまで、厳しく統制しておく必要があった。しかしながら一方では、徳川の幕藩体制を揺るぎないものにするうえで、幕府の始祖である家康の神格化を推し進める必要から、一般庶民に至るまで広く参詣の門戸を開く必要もあった。一見相反するかに思えるこの2つの条件を、彼らはいかにして同時に満たすことができたのか。本論文では、その実現に大きな貢献を果たした存在として、日光山内を案内する観光ガイド「堂者引き」に着目する。ルーツの上では伊勢や熊野と同じ山岳信仰の聖地であるにもかかわらず、伝統

¹ World heritage committee 23rd session, Marrakesh, Morocco. 1999. *Convention concerning the protection of the world cultural and natural heritage*. [<http://whc.unesco.org/archive/1999/whc-99-conf209-11e.pdf>; Accessed 2012.01.20]



図1 日光山内とその門前町の現在の様子

国土地理院 1/25,000 地形図「日光南部」(平成 14 年 7 月 1 日発行) 部分。図中央に東照宮や二荒山神社などの聖域があり、大谷川に沿って東へ下った辺りにかつての宿場町(鉢石宿)がある。

的な組織としての堂者引きは今や日光にしか現存せず、その歴史的経緯や現状を主題として扱った学術論文はこれまで書かれたことがなかった。本論文ではまず、堂者引きに関して断片的に述べられた情報を文献研究によって整理し、基礎的な知見を得るとともに、観光学の視点から、堂者引きそれ自体のもつ文化的景観あるいは潜在的な観光資源としての価値の再定義を試みるものである。

2. 日光の社寺

日光山は、栃木県の北西部に位置し、766 (天平神護 2) 年の勝道上人による日光開山伝説がその揺籃とされる。その後、霊峰男体山を主峰とする 2,000 メートル級の日光連山全域にわたって山岳信仰の聖地となり(図 1)、鎌倉時代には修験道と神仏習合の思想が加えられて、「日光三所権現」(三山・三仏・三神の信仰形態)が確立してい

くことになった(日光街道ルネッサンス 21 推進委員会 2003²)。中世以降は「世の諺にいへり、未日光を視ずハ結構の語を発すべからず」という俗諺まで生じ、参詣しない者は生涯肩身の狭い思いをするとされるほど、御山詣でが大いに奨励されていた(石倉 1902³, 柴田 1983⁴)。その後、豊臣の治世に一旦衰退の瀬戸際に立たされたものの、徳川時代には、家康公を大権現として祀る東照社(後の東照宮)が鎮座する聖地として、幕府の手厚い保護を受け、大名から庶民に至るまで多くの参詣者を集めてきた。例えば 1841 (天保 12) 年には年 35,042 人⁵の堂者が、日光を参拝しに訪れている。

² 日光街道ルネッサンス 21 推進委員会 2003. 『栃木の日光街道—荘厳なる聖地への道—』宇都宮: 下野新聞社.

³ 石倉重繼 1902. 『日光名所圖會』東京: 博文館.

⁴ 柴田豊久 1983. 『近世日光下野刀剣考 柴田豊久著作集』栃木: 下野新聞社, p. 100.

⁵ 日光市史編纂委員会編 1979. 『日光市史』日光: 日光市, p. 870.

家康が祀られ、寛永の大造替を経て日光の聖地化が完了した直後、一般庶民の東照宮参拝はすぐには認められず、いつからそれが許されるようになったかは定かでない。しかし、1655（明暦元年）9月17日の幕府法令（日光山下知条々）では、これが既に認められており、その際の条件として「参詣者之道者」すなわち道案内人に先導をさせることが掲げられていた（秋本 1982⁶，春日 2007⁷）。徳川家康が東照大権現として日光山に祀られたのは 1617



図2 明治期の堂者引きのようす

『日光大観』所収（部分）。複数の堂者引きが袴をまとい、参詣客を先導する様子が描かれている。

（元和3）年、東照社が1636年の大改築を経て宮号宣下により東照宮となったのは1645（正保2）年であり、かなり早期から幕府は庶民の参拝を認めていたことになる。その狙いは、庶民に東照大権現となった家康を参詣させることで、幕府の神祕的権威を高めることにあったといえよう⁸。管見の限り、この日光山下知条々の記載が、堂者引きに関する最も早い時期の記録であると考えられる。

東照宮への参内にあたっては堂者引きの帯同の他にも、乗り物を降りる下馬場の位置は身分や格式で細かく分けられており、参拝が許される場所も、庶民は陽明門まで、幕臣や大名は拝殿までと、細かく決められていた。さらに、表門前では履物や被り物の交換を求められ、案内人のない者はそこ

から先への参入を許されず、陽明門では刀を供頭に預けることを求められ、拝礼の文言までも身分によって細かく決められていたという⁹。以上のように、日光への参詣は、驚くほど早くから庶民にも認められ、家康の神格化に大いに貢献した。その一方、拝礼までには多くの手続きが必要とされた。いわば“勿体をつける”ためのこうした手続きが、参詣という行為を通じて幕府の権威を再確認させる上での舞台装置の役割を果たしていたといえよう（図2）。

3. 宿坊、檀那場と堂者

もともと「道者」とは、専ら山籠荒行の徒を指す表現であり、日光山を含む山岳信仰や修験道にルーツがある。しかし江戸時代、庶民の生活がある程度豊かになると寺社参詣が信仰と遊興の両方の側面をもつようになり、寺請制度によって檀那寺への参詣や年忌法要、つけ届けが実質的な義務と

⁶ 秋本典夫 1982.『近世日光山史の研究』東京：名著出版。

⁷ 春日武之 2007.「堂者引き」．日光山輪王寺 75: pp. 201-203.

⁸ 前掲 6（日光市史編纂委員会編 1979）、pp. 869-870.

⁹ 前掲 5（柴田 1983）、pp.105-106.

なった。その結果、寺坊と檀家（檀那衆）との結びつきは地域を超えて拡がり、本山への参詣は一般の人々にとって重要なイベントとなっていた。この参詣にあたって世話役となり、全国の信者と社寺との関係を取りもっていたのが「道者」であった。道者は、伊勢でいう御師¹⁰、熊野でいう先達¹¹と呼ばれる人々とほぼ同じ役割を担っている。彼らは自らの宿坊で参詣客を迎えて旅の便宜を図るほか、各地に派遣され、派遣先で講の世話や御札・御守類の配布などを行っては初穂料・祈祷料や賽銭を徴収し、一門の勢力拡大に貢献した。その結果、勢力の強い道者により多くの檀那や祈祷料などが集まるようになった。日光では、この参詣者を修験の「道者」ではなく参詣客の「堂者」として書き習わしたようである。

室町時代までは坂本と呼ばれる日光山の門前町であった鉢石町周辺は、1644（正保元）年に伝馬宿とされ、日光街道の終点で人馬の継立や助郷賦課などの業務を行う宿駅として発展を遂げた。『日光道中宿村大概帳』（1843年）に、「男は往還稼ぎ、見世商いなどいたし、女は糸を取り、機を織る」と記されていることなどをみても、鉢石宿の生業が重度に参詣客との関わり合いの上になりたっていたことを物語っている。しかし、1710（宝永7）年には、通行量の増大を鉢石町の伝馬では賄いきれなくなり、隣接する御幸・石屋・松原の三町に伝馬役の分担を願い出た（新御伝馬加役）記録が

残されている。『御幸町古来ヨリ書留覚』によると、伝馬役の分担は13年間であり、石屋・松原の両町はこの負担を受け入れたものの、御幸町は諸役免許の特権を有していたことから難色を示し、最終的には日光奉行の裁量で御幸町のみ加役が免除された¹²。このように、同じ宿場内にありながら、四町の間にはしばしば争議が起きたようで、1837（天保8）年に刊行された植田孟縉『日光山志』の日光入口東町の挿図には、各町の境界に石垣や柵が設けられていたようすが描かれている（図3）。

日光への堂者は、日光街道や例幣使街道・壬生通りをはじめ、足尾道・会津西街

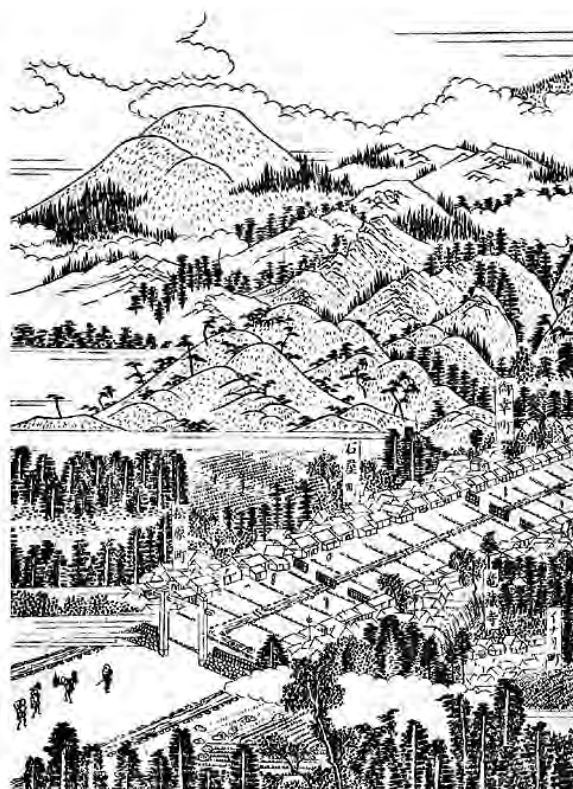


図3 鉢石宿の様子

天保年間。宿の入口には木戸と石垣があり、宿内は町ごとに柵で仕切られていた。

¹⁰ 舩杉力修 1997.「戦国期における伊勢信仰の浸透とその背景 越後国蒲原郡出雲田荘を事例として」. 地理学評論 70(8): pp. 491-511.

¹¹ 新城美恵子 1999.『本山派修験と熊野先達』東京: 岩田書院.

¹² 前掲3（日光ルネッサンス21 推進委員会 2003）、pp. 205-206.

道・日光北街道など、日光山につらなる街道を経て、日光山参詣に向かった。その多くは、御山詣だけでなく、伊勢や熊野に代表される各地の社寺・霊場への参詣・巡拝を兼ねており、その旅程からも庶民の参詣が盛んに行われていたようすを窺うことができる。こうした参詣客は大きく、(1) 山内の宿坊持ち檀家、(2) 町方の檀家、(3) いずれにも属さないフリーの参詣客（町往来）の3種類からなっていた。

日光山の山内には大小合わせて100を超える寺坊があったとされる。高野山や善光寺などと同様、これら寺坊の寺持（住職）は、全国の大名が東照宮参拝に訪れるのに備えて宿坊を設けていた。知られている最も古い記録は、『一房惣中檀那帳』に記された1686（貞享3）年の記録であり、当時80あった寺坊の全てが檀家を持っていたばかりでなく、檀那場¹³は北関東全域に広がっていたことが分かっている¹⁴。

日光に着いた堂者は、まず日光山の門前町として発展した鉢石宿の東端にある筋違橋たもとの堂者番所で、その生国や身分を確認され、檀那帳と突き合わせたうえで、泊まるべき宿坊を指示された。そこから先、各々の参拝地や宿泊地である御宮や宿坊へは案内人が先導した。彼ら堂者たちを宿坊や社寺へと案内するもの＝道者曳（現在の堂者引き）が成立したと思われる（星野

1977¹⁵、柴田 1983）。こうした由来から、堂者引きの表記は現在用いられている「堂者」以外にも、「道者」とするもの（星野 1977¹⁶、日光ルネッサンス 21 推進委員会 2003¹⁷、栃木県立博物館 1984¹⁸）や、「導者」（石倉 1902¹⁹）と表記するものなど一様でない。

一方17世紀半ばには、鉢石町を始めとする町人の中にも檀那場をもつことを許された者が47人おり、幕末の1820（文政3）年の時点でも、日光惣町内に檀那場を持つ町人は26人いたとされている。また同年の『旅籠屋・堂者引・町相方御吟味書』には、止宿渡世人として鉢石に79人、御幸町に25人が挙げられていた（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1984²⁰）。享保年間（1716～1735年）の日光山の古記『日光山条令』に「山役料48文案内料100文」をお支払い下さらば、御宮の案内をつとめましようと言ったとの記録がある。案内料100文は、当時の一泊二日の旅籠代の平均であった200文から考えると、相当な金額を得られる生業であった。このため、堂者引きと名乗り客引きをする者が増え、大きな問題となった。中には、東の町外れにある筋違橋まで出かけていき、堂者に対して客引きをする者も現れた。結果、山内（宿坊）と町方（檀那場）との間で堂者の争奪が起こり、しばしば為政者の取り締まりや争議へと結

¹³ 檀那場とは、布教や勧進のために行脚する一門の僧侶や、本山へ参詣する者のための宿泊施設のことである。類似の機能に宿坊があるが、宿坊は基本的に東照宮を拝観する大名やその随伴者の宿泊地であるのに対し、檀那場は町方向けであり、なおかつ特定寺坊の檀家を泊めるための施設であった。

¹⁴ 前掲7（秋本 1982）、p. 272.

¹⁵ 星野理一郎 1977.『日光史』日光：日光山輪王寺門跡寺務所内日光史特別頒布会.

¹⁶ 前掲16（星野 1977）

¹⁷ 前掲3

¹⁸ 栃木県立博物館 1984.『日光参詣の道』宇都宮：便利堂.

¹⁹ 前掲4（石倉 1902）

²⁰ 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1984.『角川日本地名大辞典 9 栃木県』東京：角川書店.

びついたことが、残された多くの訴答書や請願書などから明らかになっている^{21 22}。

1668（寛文 8）年 9 月には、檀那場をもつ町方に対し、宿坊の檀方を奪って泊めることを禁じ、違反した堂者一人につき過料五十疋を徴収する旨の法度が出された²³。1687（貞享 4）年には、これに違反した者が閉門 20 日に処せられたとの記録もある²⁴。こうした禁令は他にも幾つかあったようで、幕末期の 1820（文政 3）年にも、日光奉行が公認した堂者引き以外の者の案内行為が禁じられている。このときの日光奉行は旗本 1,200 石の初鹿野河内守伝右衛門信政であった。堂者引きが幕府の庇護の下に置かれ、生業としての観光ガイドとして成立するきっかけを作った彼を、現代の堂者引きたちは開祖と崇め、彼らの詰め所には現在も、「初鹿大明神」を描いた一幅の掛け軸が保管されている²⁵（図 4）。

近代に入ると、日光への鉄道網は日光鉄道会社（のち日本鉄道会社）が担い、1890（明治 23）年 6 月に宇都宮駅 - 今市駅間の開通に続いて、同年 8 月の日光駅までの区間が全通した。鉄道の開通を機に、首都圏からの日帰りが可能になったことで参詣客が増加し、1893 年におよそ年間 10 万人だった日光駅の乗降客数は、1900（明治 33）年には 17 万 6 千人にまで増加した（野瀬

2008²⁶）。当時の来訪者を特徴づけていたのは外国人来訪者の多さであり、1911（明治 44）年の統計資料では、日光の宿泊者全体のおよそ 1 割を外国人が占め、これは同年の訪日外国人 2.5 万人の 75% に上ったという（野瀬 2009²⁷）。

明治維新後の 1873（明治 6）年に社寺拝観が再開され、宿坊が廃せられると、堂者引きたちは 1881（明治 14）年から二社一寺（東照宮・二荒山神社・輪王寺）の管轄下に入り、一括共通拝観制度が始まった（日光東照宮 1970²⁸）。やがて社寺合同事務所が



図 4 初鹿大明神の掛け軸
（殿堂案内協同組合蔵）

²¹ 前掲 3（日光ルネッサンス 21 推進委員会）、p.209.

²² 前掲 7（秋本 1982）

²³ 前掲 7（秋本 1982）、p.281.

²⁴ 前掲 5（柴田 1983）、p.102.

²⁵ 前掲 8（春日 2007）、p.202. なお、掛け軸の画像は組合のウェブサイトでも公開されている

（<http://www11.ocn.ne.jp/~annai/kakejiku.jpg> 閲覧日: 2012.01.31）

²⁶ 野瀬元子 2008.「日光、箱根を対象とした観光地形成過程についての考察—観光資源、交通環境と初期段階の外国人利用の差異に着目して—」. 東洋大学大学院紀要 44: pp. 31-56.

²⁷ 野瀬元子 2009.「戦前期の日光町における観光地整備の取り組みに関する研究—栃木県の観光地整備予算に着目して—」. 東洋大学大学院紀要 45: pp. 1-21.

²⁸ 日光東照宮 1970.『大日光』日光: 日光東

案内人業務をとりしきる合同拝観制度に移行、1901（明治 34）年まで続いた（日光東照宮 1970²⁹）この二社一寺の一元的な運営体制により、案内料の一括発券がなされるようになった後も、「まづ指定の坊舎に投じ、身の不浄を清め、導者と共に、東照宮に参拝せむとて…」（石倉 1902）とあるとおり、参詣には常に堂者引きによる案内を伴わなければならなかった。東陽堂（1912³⁰）などを紐解くと、少なくとも大正時代までは案内人なしの殿堂および門内への立ち入りは禁じられていたことを確認できる³¹。

長く二社一寺の管轄下にあった案内人たちは、1923（大正 12）年 11 月 9 日、組合法の規定により日光警察署の監督下に移った（星野 1977）。さらに戦後、1952（昭和 27）年には県認可の協同組合となり、以降「日光殿堂案内協同組合」と称して現在に至っている。

4. 現代の堂者引き－アンケートおよび聞き取り調査から

江戸期以降から戦前にかけての堂者引きに関する資料が比較的多いのに対し、終戦後堂者引きの活動がどのように推移していたかを知ることのできる資料は少ない³²。

照宮。

²⁹ 前掲 29（日光東照宮 1970）

³⁰ 東陽堂 1912.『日光大観』東京：東陽堂。

³¹ ちなみに「二社一寺を別表案内料を仕払案内を頼むの便宜あり」（城田興法 1936.『日光の今昔』東京：文献社出版, p. 462）とあり、昭和 11 年には案内人の帯同は必須条件ではなくなっていたと思われる。

³² 日光市地域防災計画（日光市ウェブサイトに掲載）によると、1973（昭和 48）年 5 月 7 日に組合事務所が火災に遭ってお

本章では、筆者らが 2009 年に実施した現地調査を踏まえ、堂者引きの現状と課題について報告する。調査は組合理事長を務める春日武之氏に対して実施したインタビュー調査（6 月 24 日）と、2009 年 7 月中旬の約三週間に別途組合員の下承を得て実施したアンケート調査からなる。アンケート調査は、組合の全面的な協力の下、一括して調査票を郵送し、組合側に配布・回収いただいたものを返送してもらう変則的な郵送配布・回収方式で行い、当時の在籍者全員から回答を得られた。調査票は回答者全員が回答する質問が 31 項目あり、これに加えて回答者を居住地移動歴ごとに 4 グループに分け、各グループに対し各々 8 項目の質問を問う形で構成されているが、本論文ではその中から、戦後の堂者引きの変化を最も特徴づける、堂者引きの男女差に焦点を当てて分析する。

4-1 堂者引きの意識差－男女差に注目して－

戦後の堂者引きについて記した数少ない資料としては、1983 年に朝日新聞社宇都宮支局が制作した『日光山物語』³³が挙げられる。そこには、当時堂者引きが 60 人（男性 28 人、女性 32 人）おり、女性の割合が高かったことが示されている（pp. 74-76）。それからおよそ 10 年後の 1994 年、『日光山物語』とはほぼ同趣の『知られざる日光』³⁴を上

り、聞き取りによると史資料はこの火災でほとんど焼失してしまった。恐らくはこれが最大の理由であろうと思われる。

³³ 朝日新聞社宇都宮支局 1983.『日光山物語』栃木：落合書店。

³⁴ 読売新聞宇都宮支局 1994.『知られざる日光』栃木：随想舎。

梓した読売新聞宇都宮支局は、男女比は不明ながら組合員数が 37 人にまで減少していることを明らかにしている。



図 5 80 年代の女性堂者引きの案内風景
(『日光山物語』 p. 75 より転載)

2009 年 7 月現在、組合に在籍する堂者引きは 23 名（内訳は男性 17 名、女性 6 名）であり、減少傾向がなおも続いていた。また堂者引きとしての勤続年数をみても、男性の平均が 24 年 7 ヶ月（最短 1 年 3 ヶ月、最長 60 年）、女性 20 年 6 ヶ月（最短 1 年 3 ヶ月、最長 40 年）と、男性の勤続年数のほうがやや長い傾向があるものの、男女いずれもかなり長期に渡って堂者引きを続けていることが分かった。回答者の平均年齢は 2009 年の時点で 52.7 歳、下は 32 歳、最高齢は 87 歳であり、これも過去の記録に記されていた上 73 歳、下 23 歳（1983 年）、上 80 代、下 18 歳（1994 年）からすると、やや高齢化が進んでいる³⁵。

³⁵ 堂者引き減少の要因としては、モータリゼーションによる通過型観光地化と、長期的な入り込み客数の停滞傾向があげられる。1999 年の世界遺産登録により日光の宿泊者数は若干持ち直したものの、効果は 2 年程度で収束し、比較的效果が持続した外国人の場合も、3 年後の 2001（平成 13）年をピークに宿泊者数は減少して

また、1983 年時点に比べ、男女比も逆転し、女性の堂者引きの割合が減少しているのも特徴的であった。女性の堂者引きはもとも 1952（昭和 27）年の協同組合化の際に初めて導入された。前述の『日光山物語』には、1983 年の時点で「経歴が浅いこともあり」女性は全員が雇員であり、正規の組合員の扱いではないとの説明がなされていた。それから四半世紀が経過した時点での調査となった本調査の結果からは、女性も 30 年以上勤務している人が 3 名おり、ほかに 17 年以上の長期間勤務している者が 1 名いるなど、決して短期就労者ではないことが示された。しかし家計全体に占める女性堂者引きの収入の割合は数%～30%であり、全体の平均（約 62%：男性のみの平均は 72%）の半分以下に留まっていた。また女性回答者は 1 名を除き、全員が「主な収入源」として「配偶者の収入」を挙げていた。これは男性が最も多く挙げた「ガイドの収入」（16 人中 10 人）と鮮やかなコントラス

いる（中小企業診断協会栃木県支部 2005. 『栃木県内主要観光地の活性化戦略に関する調査研究報告書』）。世界遺産登録による短期的な集客増とその後の減少傾向は、典型的なメディア誘発型観光の集客パターンである。映画のロケ地のように、メディアによって作られた観光地イメージは、短期的には高い集客効果をもたらすものの、多くは 4 年以内にその効果が収束することが、1990 年代に多くの研究で示された。メディア誘発型観光については拙稿（鈴木晃志郎 2009. 「メディア誘発型観光の研究動向と課題」・日本観光研究学会全国大会研究発表論文集 24: 85-88. または Suzuki, K. 2011. Some overlooked drawbacks of Japanese media-induced tourism : A critical reinvestigation. *The Journal of Ritsumeikan Geographical Society* 23: 11-25.）を参照のこと。

トを成している（図6）。

男女間の意識の差は、堂者引きの地域や観光客にとっての必要性に関する設問にもあらわれた。「（地域や観光客にとって）重要であると思いますか」という設問に対し、男性の回答にはややばらつきがあった。観光客にとっての重要性を問うた設問では17名のうち「ややそう思う」が2名、地域にとっての重要性の項目では「ややそう思う」の数が5名に増え、「そう思わない」

も1名いた。これは、上記いずれの設問に対しても全員が「そう思う」と回答した女性とは異なる傾向である。同様に、「世界遺産登録されたことは良いことだと思うか」という設問でも、女性は全員が「そう思う」としたのに対し、男性は「ややそう思う」3名、「あまりそう思わない」1名と、若干ばらつきが見られた。男女差はほかに、「今ガイドをしている最も大きな理由」にもあらわれ、男性で最も多かった「安定した収入」（5人）に対し、女性は「地域の歴史を伝えるため」と「歩くことで健康を維持する」（各2人）が最も多かった（図7）。堂者引きになるきっかけとなった求人情報の入手先にも男女で違いがあり、男性は全員が家族や友人・知人からの口コミを通じて情報を得ていたのに対し、女性は堂者引きの勧誘・講演会（2名）、友人・知人（3名）、その他（1名：高校と記入）と分かれており、家族・親族からの紹介で就業した者は一人もいなかった（図8）。

こうした堂者引きにおけるある種

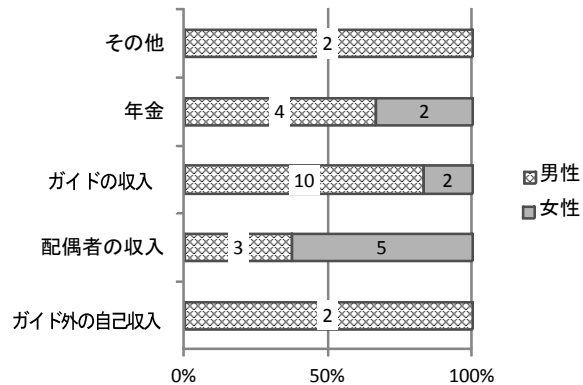


図6 男女別の主な収入源
（数字の単位は人数）

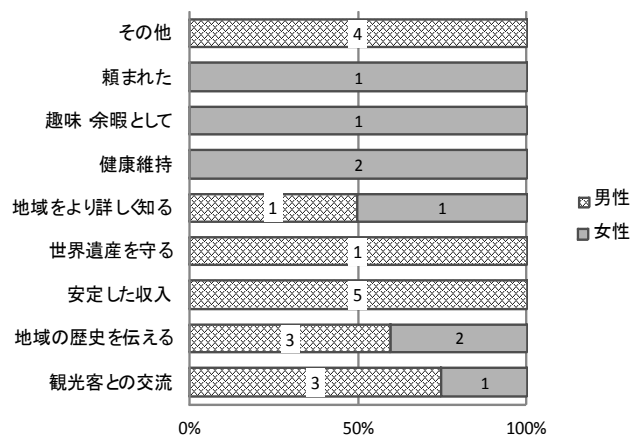


図7 ガイドをしている最大の理由
（男女別、単位は人数）

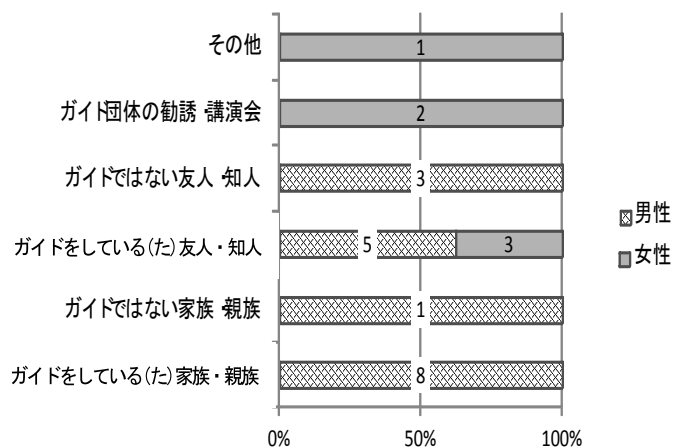


図8 ガイドの就業情報を何から得たか
（数字の単位は人数）

の性別役割分業の状態は、ジェンダー研究の視点から批判的に論じることにも可能かも知れない。堂者引きは、江戸期から続く伝統的な地域組織の側面と、いわゆる職業観光ガイドの側面との両義性のうえに成り立っていると考えられる。それが、堂者引きになるまでのプロセスや動機、案内活動を通じて得たプライドや、生業としての位置づけなど、多くの点で男女間に少なからぬ意識の違いをもたらしているのではないだろうか。

ただし、本調査では、女性の堂者引きにインタビュー調査を実施することまではできなかったため、伝統的な性別役割分業に基づく組織体系が、職業観光ガイドとしての堂者引きの近代化を阻害しているのか、それとも女性の堂者引きを導入するにあたって、男性とは別の柔軟な雇用形態をつくり出すことで、家父長制的な性格を保ちながら女性の社会進出機会を提供する組織へと脱皮したのかについて、明確な知見は得られなかった。仮に当事者たちが男女の雇用形態の違いを後者の理由で捉えているとしても、男女間で就業に至るまでのプロセスが違い、女性に対しては家族や親族までもが正規組合員として就業を勧めていない理由までは説明できておらず、こうした就業形態の違いについては今後より細やかな検討が必要であろう³⁶。

³⁶ 女性の都合に合わせたフレキシビリティを確保するために雇員制が機能しているとしても、そのこと自体が性別役割分業を強化し、空間のジェンダー化を促進するという議論もあり得る (McDowell, L. 1993. Space, place and gender relations: Part I: Feminist empiricism and the geography of social relations. *Progress in Human Geography* 17(2): pp. 157-179.). ただし、

4-2 インタビュー調査による結果の解釈

本節では、アンケート調査の事前に組合理事長の春日氏に対して実施したインタビュー調査を整理し、それらをもとにアンケートで得られた男女差に関するいくつかの知見の補足的な解釈を試みる。

堂者引きは社寺の神官に準じる特殊な職業であるため、就職希望者の家の宗派も重要な基準となり得るが、職業安定所などへ公募を出した場合、面接でこれを聞くことも、その回答を採用基準にすることも難しい。こうした事情から、堂者引きは現在でも大半が縁故採用だという。現在、代表を務める春日氏もまた、1977 (昭和 52) 年頃に縁故採用で堂者引きとなった人物である³⁷。先のアンケート調査の結果でも、男性に関しては、回答者のほとんどが親族や友人などからのロコミを就業のきっかけに挙げていた (図 8)。氏によれば、堂者引きは活動範囲が社寺の中で非常に狭いため、その範囲内の人間と良好な関係をもてる人物でなければ務まらない側面があるという。ゆえに、先に述べた信教の問題を含め、当該人物の“人となり”を確認した上で初めて声を掛ける人事選考のほうが、一見透明で公平な公募型人事よりも、実際には機能的だという考えに立っているのである³⁸。

こうした議論は本論文の主目的ではないためこれ以上は言及しない。

³⁷ 春日氏は、協同組合発足以降、長年にわたり理事長を務めた佐藤輝吉氏の任を、1987 年に選挙で引き継いだ二代目の理事長である。

³⁸ 近年、人事の大半が公募で決まるようになってきた研究者の世界でも、人物評価などを含めて適任者に声を掛ける採用人事 (俗にいう“一本釣り”) は決して無くなってはいない。これも、学生に教育サ

また、女性の正規組合員が現在でもいない理由について問うた。氏によれば、社会保障面の整備などを目的として1952（昭和27）年に協同組合になるまで、堂者引きは任意組合であった。それまで、堂者引きには宿直業務もあり、社寺警護の側面が現在より強かった。このため、女性の宿泊は問題であると考えた寺社側から、女性組合員を置かないようにとの要請があり、堂者引きは全員男性だったという³⁹。それが現在でも組合規則として機能しているのかどうかについては当方の調査不足のため不明であるが、現在も女性の組合員は存在していない。また、伝聞の域を出ないが、家庭や子育てと両立させながら就業する必要がある女性の場合、自分の当番時に一日詰め所にいるのは難しいことや、雪下ろしなどの重労働に従事しにくいことなども理由にあるらしい。

次に、既往の研究でもほとんど触れられることの無かった、彼らの就業実態について問うた。少なくとも男性の組合員にとって、堂者引きの仕事をしている最大の理由は「安定した収入」にあり（図7）、研究

ービスを提供したり、大学の名前を背負って社会的発言をする職業柄、主観的にはあれ人物評価を採用基準に盛り込むことがいまだ適任者の選定に有効であると考えられていることの表れであろう。

³⁹ 殿堂内を案内する業務の性格上、堂者引きの人事裁量権は、現在でも社寺側にある。現在の堂者引きは、二社一寺と行政が組織した二社一寺殿堂案内人管理委員会によって1961（昭和36）年に作られた組合規則に基づいて運営されている（日本比較内分泌学会2007『第32回日本比較内分泌学会大会およびシンポジウム プログラム・講演予稿集』第32回日本比較内分泌学会大会実行委員会。）。

者のみならず全国の観光ガイド団体にとっても、数百年続く日光の堂者引きの運営・就業実態は範になるところが多いと考えられるからである。

まず、案内料の料金体系について先に触れておく。2012年2月現在、同組合のウェブサイトに掲載されている基本料金（2時間案内）の料金表は表1の通りである。このほか、2時間～2時間30分までは3,000円の超過料が、半日で15,000円、1日単位で30,000円の案内料が、それぞれ掛かることになっている。既往の研究でも江戸期から戦前の料金表を記載したものはいくつかあり、それらの解説では一様に、当時としてはかなり高額であると記されていた（それが無許可の案内人が横行する理由の1つにもなっていた）。現在でも、その傾向は変わっていない。

表1 堂者引きの料金表

（2012年2月現在。2時間料金）

参拝人数	一般 高校生	小学生 中学生
1名～20名	5,500円	5,000円
21名～40名	6,500円	6,000円
41名～60名	7,500円	7,000円
61名～100名	8,500円	8,000円

氏によれば、堂者引きは基本的に組合に属してはいるものの、各人が事業主のフリーエージェントである。協同組合の名称が示すとおり、団体としては相互扶助組織の体を取り、各個人は組合活動に必要な定額の活動費（2009年現在で月額40,000円）を納めることで、堂者引きとしての活動が可能になる。活動費の支払いさえなされれば、組合はそれ以上個人の活動計画には干渉せず、月に何日案内をするか、いつ休暇

を取るかなど、一切が各個人の裁量に任される裁量労働制である。また、氏によれば堂者引きは自営業であり、定年がない。昇給もしない代わり、続ける限り収入が保証される。これがアンケートで「安定した収入」と回答した人々の含意であろう。

彼らはまた、堂者引きの間で客の取り合いになることを避けるため、輪番制をとる。各個人は、自分の順番が来たとき、たまたま当たった顧客を案内するか、その仕事を次の順番の人に回して、次の顧客を待つかの選択権が与えられる。この際、仕事が回された個人は純粋な意味での選択はしていないため、翌日の最初の顧客に対して再び選択権が与えられる（希望出番制）。このようにして、同組合はフリーエージェントとしての堂者引きが裁量権を最大限に確保しながら水平的に組織と結合し、顧客サービスを一定水準に保つ方策をとっている（図9）。また、その起源ははっきりとしないものの、少なくとも協同組合になって以降は、毎年12月21日に翌年の順番をくじ引きで決めることになっている。

彼らはフリーエージェントであるため、全てを全員協議会による合議制で決めており、その多くは明文化されないまま随時改訂されている。聞き取りでも、案内経路上で補修工事が始まった際にどうルート変更するか、解説を加える場所を変更する際、新しい地点をどこにするかなど、逐一試行錯誤のうえで議事につけ、修正や改訂、削除が加えられるという。さらには、先に案内している人間を後から来た案内人が抜いてはいけない、といった暗黙の了解が無数に存在しており、職業倫理に基づくそうした因習やしきたりと、合議制・輪番制に基



図9 堂者引きの組織構造

各組合員と組合は、運営費の支払いと営業許可とで繋がっている

づく水平的なつながりが、仲間内に独自の連帯意識を形作っている。

このほか、インタビューを通じて最も強く感じた点として、何よりも彼ら（男性）堂者引きの強烈な自負自尊の念と、他の観光ガイドにはない職業意識の強さを挙げることができる。

春日氏の解釈では、日光の社寺には単なる幕府の神格化機能のみならず、首都防衛の要害としての役割もあった。五街道は万が一将軍家が江戸城を退避するような事態になった際の避難経路の役割もあり、その実五街道の沿線の多くは、譜代や親藩によって固められ、防衛拠点となりうる城がいくつも点在していた。確かに図1で改めて日光の地勢をみると、大谷川添いの段丘上に山城様を呈して社寺が広がっている。また日光・奥州街道の前後は徳川ゆかりの大名（館林・会津）が固め、籠城可能な要塞としての位置を占めている。日光はこうした防衛拠点としての機能をもっていたことから、日光の町中に、不穏な人物や策謀に目を光らせる見張り役が必要であり、それが堂者引きに課せられた観光ガイド以外の

重要な役割のひとつであった。実際、江戸期の堂者引きの中には、日光へ赴任した武家の部屋住み（次男・三男）が含まれており、彼らが町方に住んで堂者引きを生業にしていたケースが少なからずあったという⁴⁰。その真贋はさておき、こうした一般的な観光ガイドにはない特殊な来歴が、現在の堂者引きたちがもつ強い職業意識のひとつの源泉にはなっている。

一見すると堂者引きは案内料を徴収しているため、営利目的のガイドであり、一般的なボランティアガイドのような（減私奉公的な）公共心とは縁遠いようにも思える。しかし、彼らの主張を代弁するなら、堂者引きは殿堂内の案内から利益を得ている一方で、寺社の護り手でもあり、布教活動の第一線に立つ顔でもある。通常の観光ガイドが、案内する対象とこのような共生関係をもつことはまずなく、これが彼らの強い帰属意識にも結びついている。現在ではその条件は撤廃されたものの、堂者引きの採用方針の中には、縁故採用のほかにも、徒歩10分圏内の居住や「日光在住の者」であることなどの条件が、長く含まれていたという。実際彼らは、平時には寺社の屋根の雪掻きなどに加わるほか、地元の防火組織「自衛消防隊」のひとつ（社寺殿堂案内協同組合隊）として、非常時の人員誘導を担当、定期的に防火演習にも参加している⁴¹。彼らはいわば、案内している社寺とある種

の運命共同体のような関係にあり、これが他のガイドにはない独自の職業意識に結びついている。またその意識が、自ずと彼らを案内業務以外の地域貢献活動に向かわせている点は注目に値するだろう。近年、全国的にボランティアガイドの設立が盛んであるが、その持続性を検討する上で、こうした組織運営のあり方は、ひとつのヒントになりうるのではないだろうか。

5. 考察

日光は、伊勢や熊野と同じく、修験道や山岳信仰をルーツに持つ霊山であった。伊勢や熊野もまた、近代まで同じように道者を従え、全国に檀那や門徒を抱えていたはずである。にもかかわらず、本論文でとりあげた堂者引きにあたるプロの観光ガイドは、これらの地域では姿を消してしまった。なぜだろうか。本論文では、資料分析と聞き取りの結果を踏まえ、徳川幕府の思惑から日光山が一種の御料地となり、幕府の強力な庇護と管轄の下に置かれたことで、参詣客の立ち入りを思うままに制限でき、それが堂者引き存続の大きな要因となったことを明らかにした。

景観の維持要因としての権力は、現在ではユネスコや国家によって価値づけられ保護の対象となっている自然保護区（Biosphere reserve）のいくつかは、かつて王侯貴族の狩り場としての御料地（Game preserve）だった事実を、鮮やかに想起させる。

ヨーロッパでは、古くはローマ帝国の時代から、狩猟権が権利のひとつとして明文化されるほど重視されていた。封建制度が

⁴⁰ 無論、仮にそういう隠密としての役割が与えられていたとしても、それは堂者引き全体のごく一部に限られていたであろう。

⁴¹ 2012年には1月17日に防火訓練が行われ、翌日の地元紙（讀賣新聞）にその記事が掲載されている。

定着すると、狩猟権は領主や貴族、一部の豪商が独占的にもつ権利となる。彼らは自らの領地に御料林を設定して管理し、領民の狩猟を厳しく制限するようになった。

ヨーロッパ全土に広まった狩猟権や御料地の概念を、中世イングランドへ広める役割を果たしたのは、「征服王」の異名で知られる現イギリス王室の開祖ウィリアム 1 世 (William I: 1027-1087) である。彼はイギリス王への即位後、まず英国全土の土地・人口・家屋などを記載したドームスデイ・ブック (Domesday book) を編集させ、これをもとにした租税賦課のシステムを確立して王制財政の基礎を固めるとともに、1072 年にはカンタベリーとヨークの両大司教の争いに干渉、カンタベリー側を第 1 位の大司教と定めることによって司教叙任権を握り、中央集権的な封建制度を築き上げたことで知られている。しかしながらその一方、彼が即位後ただちに、御料林 (フォレスト) の画定を進めたことは余り知られていない。

ウィリアム 1 世は、それまで各地で流布していたアングロサクソン人の慣習法にノルマン人の『王国の一般的慣習』 (General custom of the realm) が卓越するとし、現在まで続く世俗法としてのコモン・ローの概念を確立させた人物である。しかし、御料林だけはコモン・ローではなくフォレスト・ローと呼ばれる別の法体系に基づいて管理され、御料林のための裁判所や林務官が密猟や盗伐の摘発にあたった⁴²。

⁴² (1) Brander, M. 1971. *Hunting and shooting*. Sussex, UK; Littlehampton Book Services Ltd. (2) Griffin, E. 2007. *Blood sport: Hunting in Britain since 1066*. London, UK; Yale University Press.

御料林が設けられた理由は狩猟の対象となるアカシカの保護にあり、やがて入会料の罰金の徴収へと変化していったが、結果的にはこの制度そのものが環境保護に大きな貢献を果たす。フォレスト・ローに基づく御料林管理のシステムは 17 世紀までには崩壊するものの、最盛期にはその面積がイギリス全土の 3 分の 1 にまで達するほど広大であった。この豊富な森林資源が、のちに世界で最も成功した自然保護運動の礎となったからである。低所得者層のための福祉住宅の整備に奔走していた篤志家のオクタヴィア・ヒルと、1865 年に設立されたイギリス最古の民間環境団体『共有地保存協会 (Commons, Open Spaces and Footpaths Preservation Society)』の弁護士だったロバート・ハンターが、1895 年に創設した『歴史的名勝と自然的景勝地のためのナショナル・トラスト (National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty)』がそれである⁴³。国土の自然環境や文化遺産を財産とみなし、「国民あるいは世界の財産として次世代へ引き継ぎたいが、所有権や法的・経済的な問題により維持が困難なもの」を国民自身の寄付によって集められた資金で買い取り、保全する。これが、ナショナル・トラストの活動である。

1985 年に非営利団体となったナショナル・トラストは、多くの人々からの寄付を集め⁴⁴、現在では会員数 350 万人、イギリス、

⁴³ (1) 木原啓吉 1984. 『ナショナル・トラスト』東京: 三省堂. (2) 藤田実花 2006. 「イギリスにおけるナショナル・トラストの発展過程に関する考察」. 東北大学社会学部卒業論文(未発表).

⁴⁴ なかでも『ピーターラビット』の作者として知られるビアトリクス・ボター

アイルランドとウェールズ地方全域に 248,000ha を超える土地と約 1,100km の海岸線、200 以上の歴史的庭園・邸宅を抱え、英国王室に次ぐ広大な土地の所有団体となった。しかし、世界で最も成功した環境保護運動のひとつとされているナショナル・トラスト運動の礎となったのは、かつての御料地だったのである。

むろん、日光とイギリスの旧御料地とを単純には比較することはできない。双方には決定的に違う点がある。それは、基本的にイギリスのそれは狩り場をルーツにもつ立入禁止の場所＝原生またはそれに準じる自然景観であるのに対し、日光の御料地は、人や社会と自然の歴史的な関係のありようが現代に引き継がれた文化的景観 (Cultural landscape) であるという点である。

日本はいわゆる世界遺産条約を、先進国中最も遅い 1992 年に批准した。本論文が対象とする日光の社寺も、この条約に基づいて世界文化遺産に登録された場所である。奇しくも日本が条約を批准したのと同じ 1992 年 12 月の第 16 回世界遺産委員会で、「世界遺産条約履行のための作業指針 (Operational guidelines for the implementation of the world heritage convention)」を改訂する形で採択されたのが、文化的景観の概念だった (Rössler 2002⁴⁵, pp. 10-11)。この概念は、所有権と

結びつきの強いそれまでの「文化財 (Cultural property)」概念に代わる、より包括的な概念として提示された。その源流は、世界遺産条約の採択 (1972 年) に先立つ 1962 年の第 12 回ユネスコ総会で採択された、「風光の美と特性の保護に関する勧告 (Recommendation concerning the safeguarding of the beauty and character of landscape and sites)」に、早くも認めることができる。世界遺産条約によって自然景観や文化財を保護してきたユネスコは現在、この新たな概念装置を、各国の国内法と連動させつつ導入し、新たな景観価値体系を内在化させつつある。

文化的景観はいくつかのカテゴリから成るが、本論文と関わりが深いのは「有機的に進化した景観 (Organically evolved landscape)」であり、ルソン島イフガオ州のコルディレーラ高地にある棚田はその代表例とされる (Schippers 2010⁴⁶)。世界遺産条約にもとづく文化的景観の中でも、このカテゴリに当てはまる文化的景観は最も多く、全体の 50% 以上を占める (Fowler 2002⁴⁷)。日本でも、合掌造で知られる岐阜県の白川郷がこのカテゴリに属する。白川郷の場合も、合掌造の伝統家屋は、地に残る屋根の葺き替えのための相互扶助シス

culture: World heritage cultural landscapes. World Heritage Centre ed. *UNESCO World heritage papers* 7: pp. 10-15.

⁴⁶ Schippers, T. 2010. Securing land rights through indigenouness: A case from the Philippine Cordillera highlands. *Asian Journal of Social Science* 38-2: pp. 220-238.

⁴⁷ Fowler, P. 2002. World heritage cultural landscapes, 1992-2002: A review and prospect. In World Heritage Centre ed. *UNESCO World heritage papers* 7: pp. 16-32.

(Beatrix Potter) は、1,700ha を超える湖水地方の土地を自ら買い取って、ナショナル・トラストに寄付した (Amend, T., Brown, J., Kothari, A., Phillips, A., and Stolton, S. eds. 2008. *Protected landscapes and agrobiodiversity values*. IUCN & GTZ. Heidelberg; Kasperek Verlag.)。

⁴⁵ Rössler, M. 2002. Linking nature and

テム「結（ユイ）」によって維持されてきた⁴⁸。

文化的景観は、必ずしも文化財としての実体を持たない社会システムや文化慣習なども、景観を構成し維持せしめる重要な要素に含めて概念化することにより、景観保全を持続的なものへと結びつけていく思想的運動である（鈴木 2011⁴⁹）。本論文で対象とした堂者引きもまた、社寺を護る重要な存在としての機能を果たしてきた側面があることを忘れてはならない。聞き取りに際し彼らは、個人単位でも児童のスポーツ教室のコーチなどとして様々な地域貢献活動を担っているだけでなく、定期的な防災訓練や寺社の雪掻きを実施し、万が一の際には地元住民の避難誘導の役目も担っていることを誇りにしていた。日光へ詣でた我々は、ともすればその絢爛豪華な殿堂に目を奪われがちである。しかし、かつては殿堂群の威光を強化する舞台装置のひとつとして、そして今は“神話”の語り部のみならず警護役や非難誘導員として、彼らの地道で多面にわたる貢献があつてこそ、日光の文化的景観は維持されてきた側面があるのではないだろうか。

6. おわりに

韓国政府機関のコンテンツ振興院によって仕掛けられた K-POP や韓流ブーム⁵⁰がそ

うであつたように、現代の観光イベントの多くは、報道され、再現されるために仕組まれたものに立脚している。観光客はメディアによって都合良く仕組まれた「疑似イベント（Pseudo-events）」を本物だと信じ込まされ、踊らされている受け身の存在に過ぎない。かつてそう看破したのはアメリカの評論家ブーアスティンであつた⁵¹。この見解を批判したマッカネル（1976）⁵²は、観光客はオーセンティシティ（Authenticity）すなわち真正でリアルな“本物らしさ”を求めて、主体的に行動しているのだと主張した（MacCannell 1976, pp. 103-104）。

マッカネルは、社会学者ゴッフマンの役

ツ振興院とは?」・アウラ 202: pp. 25-27.) の報告を参照。2012年2月6日付東亜日報によると、同月の韓国銀行国際収支統計が発表した2011年の文化産業の海外収益は7億9,400万ドル（約8,900億円）に上り、過去最高額を記録した。ただし、その宣伝費を含む支出額は10億1,780万ドルで、2億ドル以上の赤字であり、知的財産権収益も43億2,050万ドル（史上最高）でありながら、29億8,120万ドルの赤字であつた。こうした赤字体質の原因のひとつには、韓流コンテンツの日本国内における知的財産権を日本のマスメディアに掌握されていることが考えられる。JASRACの「作品データベース検索」でK-POPの楽曲を検索すると、その大半は韓国人の著作物でありながら、フジテレビの連結子会社フジパシフィック音楽出版が権利者である。

⁴⁸ 才津裕美子 2006.「世界遺産の保全と住民生活—『白川郷』を事例として」・環境社会学研究 12: pp. 23-40.

⁴⁹ 鈴木晃志郎 2011.「重要文化的景観としての散村景観をめぐる一考察」・砺波散村地域研究所研究紀要 28: pp. 8-22.

⁵⁰ コンテンツ振興院の行っている文化政策については、内田（内田宏昌 2010.「国が支援するコンテンツ政策 韓国コンテン

⁵¹ ブーアスティン, D.J. 著・星野郁美・後藤和彦訳 1974.『幻影の時代—マスコミが製造する事実』東京: 東京創元社.

⁵² (1) MacCannell, D. 1976. *The Tourist: A new theory of the leisure class*. New York: Schocken Books. (2) ディーン・マッカネル著・遠藤英樹訳 2001.「演出されたオーセンティシティ」奈良県立医科大学研究季報 11(3): pp. 93-107.

割理論を援用しつつ、舞台上と舞台裏を行き来できる演技者と、舞台上の行為しか見聞きできない観客との関係が、ちょうど観光におけるホスト～ゲストの関係と類同的であるとした。ここで重要なのは、ゲストである観光客は舞台裏を覗くことを許されないが、舞台裏があることは知っているという点であり、それゆえ観光客は隠された舞台裏（＝本物らしさ）を覗こうとする存在だということである。もし観光客が、メディアによって報道されるがままの擬似イベントを受け入れるだけの存在なら、情報の送り手側はイベントを本物らしく偽装する必要はない。イベントが本物らしくあらねばならないのは、観光客の側が本物らしさに価値を見出し、それを求めて行動するからである。この観光客の主体性ゆえに、観光客に舞台裏を垣間見せる観光業者の操作が、価値を持つようになる。これがマッカネルのいう「演出された真正性（Staged authenticity）」である。演出された真正性の具体例として彼が挙げたのが「教育的なツアー」、すなわち児童向けの社会科見学や、ケネディ宇宙センターの内部見学であった。ガイドの講釈を聴きながら、普段は立ち入ることのできない舞台裏の領域を垣間見ることが、それらのツアーは可能にする。ただし、彼らが見ている舞台裏は確かに実際の業務がおこなわれる空間ではあるが、あくまでも「演出された」舞台裏なのである。

翻って、本論文が対象としてきた日光の社寺と堂者引きの場合はどうだろうか。かつて江戸時代に行われていた拝観は、実際の拝観に至るまでの細かな規則が定められ、それを踏襲することで門内に入り、神域の舞台裏を垣間見ることが許された。これが、

日光山に演出された真正性を与え、神的権威による幕藩体制の維持につながっていた⁵³。その聖域を案内する堂者引きは、自らも袈裟に着替えて権威を纏うことにより、「教育的なツアー」における観光ガイドの役割を果たしていたのである。

江戸幕府が倒れ、堂者引きの帯同が拝観の必須条件ではなくなった今日、日光に拝観する観光客が求めている真正性は、すでに失われた日常への遠い憧れのようなものに変容しているかも知れない。しかし、その憧憬の念が“訪れる価値”につながるとすれば、彼らが堂者引きに求める“演出された真正性”について、今一度検討してみる価値はあるかも知れない。例えば、彼ら自身が袈裟をまとって堂内を案内するなどの試みは、社寺のみならず、観光ガイド自体の歴史と伝統を目に見える形で示し、新たな本物らしさを生み出すことにはならないだろうか。ハードとしての建造物群のみならず、堂者引きを含む社会システム全体として日光を脱構築するとともに、彼ら自身が現代に残された文化の生き証人として堂者引きを再定義するとき、日光は文化庁のいう“文化的景観”としての、新たな可能性をもつように思われた。

謝辞

本論文は、著者が前務校（旧東京都立大学）在職中の2009年6月24日、同大大学

⁵³ 特定の事物に意味や価値を与えることにより、国民国家の統合象徴として機能させる上で、オーセンティシティが果たした役割を検討した例として、荒山正彦1995.「文化のオーセンティシティと国立公園の成立」．地理学評論 68(12): pp.792-810 を挙げることができる。

院生の木下万里と共同で行った現地調査・資料収集をもとに執筆しました。論文の作成にあたり、日光殿堂案内協同組合の春日武之氏からは、長時間にわたるインタビューに応じて頂き、貴重な資料をお貸しいただいたばかりでなく、アンケート調査の取りまとめにまでお力添えを頂きました。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。また、同組合員の皆様には、アンケート調査にあたって快くご協力を頂きました。貴重なお時間を割いてくださり、まことに有り難うございました。このほか、文献収集にあたって、日光市立日光図書館司書の佐藤澄江女史から、非常にレベルの高いレファレンス・サービス（情報サービス）をご提供いただきましたことを此処に銘記し、御礼の言葉に代えさせていただきます。以上の皆様には、諸事情から研究成果の公表が遅れましたことをお詫び申し上げ、頂いた御厚情に改めて感謝申し上げます。

（受理 2012 年 3 月 1 日）